



夢の本棚

発行所：松居直コレクション
プロジェクト
代 表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉
③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

「子どものとも」を彩る作家と画家たち④

〜日本でのノンフィクション絵本の草分け〜

瀬田貞二さんが想像して

◆瀬田貞二さんの初めての絵本が「なんきょくへいったしろ」な感じです。当時、南極観測船が日本からまだ行く前だったんです。隊長は、西堀栄三郎先生だったんですね。私の叔父と一緒に大学生の頃、スポーツをしてらしたもんですから、私の叔父に紹介されて、南極観測隊の本部がありました国立科学博物館にお会いしに行きました◆物語は、瀬田さんにお願したんですけれど、まだ南極に誰も行ってないんですね。これから南極に行くわけですから、南極ってどういうところかさっぱりわからない。で、瀬田さんと一緒に、上野の科学博物館の西堀先生のお部屋に2人で参りました◆南極を舞

台にした絵本をぜひ日本の子どもたちのために、将来のことを考えれば出したい。ノンフィクション的な絵本をこれからは必要だと思っで、「南極ってのはどういふところか聞かせたいだけじゃせんか」と西堀先生に申し上げたら、「それがわからないから、これから行くんですよ。帰ってきたら教えますよ」とおっしゃったんですね◆「ああ、わからないー」確かにわからないんですけども、いろんなヨーロッパの本や絵本なんかも取り寄せまして、アザラシとかペンギンだとか、そういうものが出てくる絵本を参考にしまして、瀬田さんが想像ですけども、南極ってのはこういうところ、こういう物語が成り立つんではないかということを書いてくださったんです。

船のことなら 寺島龍一さんに



◆寺島龍一さんの方は油絵画家です。寺島さんの展覧会の油絵は、ほとんど人物ですけども、面白いことにこの方は、船のことが非常に詳しい。寺島さんに言わせると、「いろんな児童文学の中に船が出てくる作品があるけれども、その挿絵を見ると、ほとんどおかし。原作と挿絵の船とがマッチしてない」ということをとってもよくおっしゃっていただきました。船をとってもよく描いてらっしゃったんです◆船のことだから寺島さんがいいということ。もう一つは、瀬田貞二さんはその頃、平凡社の児童百科事典の編集長をしてらっしゃいました。思い切った編集をされてますけど、その時に瀬田さんは、

文章を書くライターと絵を描かれる人をどんどん新しい人を起用されて、その一人に寺島さんがいらしたんです◆寺島さんは、児童百科事典では乗り物について絵を描いてらしたんですね。瀬田さんの、そういう絵描きさんの選び方っていうのは、私はとっても勉強になりました。

西堀先生からのお墨付き



瀬田貞二作/寺島龍一画
5号/1956年8月号

◆「なんきょくへいったしろ」ーしろが南極へ行くわけですね。そこでいろんな経験をします。しろの目を通して、南極というのを子どもたちに伝えるというのが、このお話なんです◆新聞でもラジオでも、何かというと南極観測ということが話題となっていました。これが出た時に、西堀

先生が南極から帰って来られましたので、これを私が持って行きまして、ずっーと見て「こんなところですよ。南極がよく描けている。ほとんど間違いはない」というから大笑いだったんです。西堀先生のお墨付きだから子どもに見せてもいいだろうと、私は安心をしました。

ノンフィクション絵本を

◆当時、日本では、ノンフィクションの絵本というのがほとんどなかったんですね。フランスの「ペール・カストール」の絵本シリーズなんかには、ノンフィクション的なものがとっても多かったと思います◆イギリスやアメリカの絵本なんかにも物語だけじゃなくて、いろんな社会的な問題を取り上げて伝えようという動きがありました。日本ではなかったんで、これが草分けだろうと思います。(つづく)